

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2011年3月23日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.49 「左手の役割」

東北地方太平洋沖地震で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りすると共に、被災された皆様に心から御見舞い申し上げます。私の関係する該当地区の塾関係者からも悲惨な状況が次々と報告されています。

私事で恐縮ですが、自らの不注意から左上腕部を骨折し、ここ1ヶ月ほど不自由な生活を続けています。現在、電車とバスを乗り継いで事務所に通い、右手一本でキーボードを叩いています。不自由な生活ですが、この境遇になって初めて気付くことがあります。

1つは世間の優しさです。

多くのお見舞いメール、電話をいただきました。日航のCAさんは、トイレにも付き添ってくれました。スーパーのレジのおばちゃんは商品の袋詰めまでしてくれました。食事会で訪れたレストランでは、上下スポーツ・ウェアという場違いな服装を受け入れてくれただけでなく「そんな大変な時にご来店いただき、ありがとうございます」と声を掛けてくれました。その他、大勢の方に親切にいただいています。この世の中、捨てたものではないと改めて思います。

もう1つ、気付いたことがあります。

最初は「骨折したのが左腕で良かった」と思っていました。いえ、確かに良かったのでしょう。ただ想像した以上に右手だけでは何も出来ないということを知りました。右手だけだと、半分どころか両手の5分の1程度のことしか出来ないのです。ズボンのファスナーは上げられないし、瓶のキャップも開けられません。利き手ではない左腕が、こんなに重要だったとは気付きませんでした。

で、思ったのです。組織も同じだと。

一人で出来ることには限界があります。

これが二人になれば、5倍のことが出来るのではないかと。10人、100人が集まれば、どれ程のことが実現できるのでしょうか。また、人には様々な種類があります。右手のように、一見華やかで目立つ存在の人もいます。しかし、組織の中では目立ちませんが、瓶を支える左手のように隠れた貢献をしている人もいます。また、そんな人の存在抜きでは、瓶のキャップは空きません。組織全体の成果が上がらないのです。あなたの塾にも、そうした役割を演じているスタッフがきっといることでしょう。

未曾有の大災害を目の当たりにして、何も出来ない無力を感じている方も多いと思います。確かに、右手のような目立つ支援活動は出来なくても、左手のような社会を支える地道な支援は出来ると思います。僅かな募金でも、節電に協力することも…そうした社会全体の支えがあって初めて一歩前進できるのです。

キャップを開けることは出来なくても、瓶を支えることは出来るはず。ぜひ、左手の役割を果たして下さい。

第1回 教科書が新しくなるのは、なぜ？

はじめまして。かえでプロダクションの羽根です。主に教材・模試の作成や、教材アナリストとして教材研究を行っています。できるだけ塾の先生視点で、今年の4月から実施される『新学習指導要領』について、簡単にご紹介をしていきます。どうぞよろしくお願いたします。

さて、第1回目は「教科書が新しくなるのは、なぜ？」ということについて、ご説明していきます。

最近、「新学習指導要領」という言葉をよく耳にします。この学習指導要領とは、公立学校で教える学習内容のことで、文部科学省が四年に一度、改訂しています。いつもはそんなに大きく変わることはないのですが、今回の改訂は業界で「過去最大の大改訂」と言われています。

なぜ、「過去最大の大改訂」をしないといけなくなったのか…。これは、2002年から実施されている『ゆとり教育』に根源があります。もともと『ゆとり教育』とは、20世紀後半に流行した「小学生による中学受験戦争は止めましょう」という発想から生まれたものでした。しかし、ゆとり教育世代がいよいよ大人になってみると、一部の若者がいろいろな問題を起こすようになりました。例えば、暴れる成人式、ニートの増加、犯罪の低年齢化などです。学力についても、OECDが3年に一度実施している「PISA型学力テスト」の成績が年々低下していました。それらの結果を踏まえ、文部科学省は指導方針の方向転換を選択しました。

**「これからは『脱ゆとり教育』をし、
新しく『生きる力』を養うことを目指しましょう！」**

これが、新学習指導要領の大本にある考えです。『生きる力』を養うためには当然、学力も必要です。そこで、今回の新学習指導要領により、大幅に学習内容が増加することになりました。特に、理数系の内容は大きく追加されることは周知のことですが、国語と社会も追加事項がかなりあります。そのあたりの詳しい話は、また次号以降でお話します。

現在、詳しくわかっているのは新しい小学校の教科書だけです。その教科書がどうなるか大きく3点触れておきます。

①小学校の教科書が大きくなる！（出版社によります）

従来までB版だった教科書がA B版になります。簡単に言うと、一回り大きくなります。だから、最近、よくランドセルのCMを見かけるようになったんですね。

②小学校の教科書の上下巻がなくなり、一冊にまとまる！

（全部ではありませんが…）例えば、国語の光村図書小5・6は、これまでの上下巻から、各学年272ページの合本になります。理科の東京書籍小3～6もすべて合本になります。

③小学生の教科書の分厚さが約1.4倍になる！

小学校全教科全学年で学習指導内容が増加しているため、教科書のページ数が現在の約1.4倍になります。

また、小学校の各教科について、簡単に変更点を説明すると…

①算数

一言でいうと「スパイラル学習」です。例えば、分数で説明しますと、小2で分数の基本、小3で分数の意味、小4で同分母の加減、小5で異分母の加減、小6で分数の乗除を学習します。

②理科

「物質・エネルギー」と「生命・地球」の2領域になります。また、観察や実験を多く行い、体験学習が増加します。

③国語

古典の導入、思考力の育成が目立つポイントです。また、漢字表記やルビが多くなります。

④社会

日本地図や世界地図の把握と暗記、地球儀の活用など地理分野を強化しています。歴史では、縄文時代も復活します。

今、日本は教育改革の真っ只中です。分かり次第、いろいろな情報を開示していきますので、把握できるようにがんばります。では、今日はここまでです。

全国主要大手塾・地域一番塾の塾長と人事部トップに、中長期的な人材戦略について取材しました。取材中に、ちょっと気になる情報も幾つか入ってきて、これについては今後十分注意する必要があると思われる。

その一「ヘッドハンティングが横行している・・・」

創立から半世紀、塾を卒業して社会人になる人たちが続々と入社してきている。スタートしたばかりの個別指導の講師にも、塾卒の学生が登録して頑張ってくれている。こうして人材が循環していくことが理想的だ。

最近、各校舎におかしな電話が頻繁にかかっている。『今の仕事に不満はないか』『転職して収入を上げてみる気はないか』『独立して自分の城を持つ気持ちはないか』など、気をそそるような質問を矢継ぎ早にして切られる。個人宛てのダイレクトメールも届く。

どこか大手塾の差金なのか、それとも異業種から依頼されてのことなのか・・・よく分からないが、気持ちが悪い。幸い、誘いに乗る社員は今のところ皆無だが、受験期で忙しい今なぜなのだ、仕事を妨害されているとしか思えない。（西日本N塾）

その二「アルバイト講師を正社員にせよ」

大学生でアルバイト講師にきている若者たちに、塾での仕事の充実感と教わる生徒たちの真剣さを体験してもらい、卒業後も同じ仕事をしたいと思ってもらいたい。強引な飲み会などはせず、人生の先輩として良き話し相手になる。人を教える仕事に興味を持っている学生は意外に多く、塾でアルバイトしたい人はさらにその気持ちが強いことがわかる。だからこそ、そういう人たちのために働き甲斐のある職場環境づくりに努めたい。（東日本U塾）

その三「塾は社会貢献できる仕事だ」

異業種で働いていても子どもに関わる仕事がしたいと思って転職してくる人は増えている。塾が安定経営をしている企業であることを裏表なくPRすれば、有能な人材が転職で応募してくるはずだ。就職氷河期で、転職希望者の数も多いが、その中からチョイスするとすれば、子供の学習支援にどれだけ関心があるかだ。最近では、新聞やテレビなどで、国際的な日本の学力レベルが下がっていることを知り、それを懸念して塾に勤めたいという人もいる。塾は社会貢献ができる仕事だということをもっと知ってもらいたい。

（中部東海T塾）

その四「地域ナンバーワンであり続けるためには」

大手塾の業界再編が進み、地域一番塾として経営維持するためには、有能な人材確保が最優先課題だ。新たなコース設定をしても、人材がいなけ

れば成功しない。たとえば、公立中高一貫校対策コース、私立中学受験コース、公立中高一貫・私立在学コースなどだ。さらに、個別指導においてもマネージメント能力の高い人材を育成できなければ、他府県展開もままならない。プレッシャーに強く、それを跳ね返して自分の仕事を楽しめるような人材を育成したい。そのためには、採用段階で少し物足りないと思っても、採用してから育成する仕組みを充実させて一人前にしてあげたい。

上辺だけの特訓ではなく、泊りがけの合宿研修や夏の受験合宿で生徒と一緒に頑張ってもらうなど、体で、肌で教育の醍醐味を実感してもらおう。そうすれば、筋金入りの教育者への道が開かれると思っている。（東日本S塾）

その五「個人評価とグループ評価に工夫を」

賞与の査定は、個人評価と校舎単位、部門単位で分けている。個人的に競争することも大事だが、同じ目的を持つグループで他のグループには無い実績をつくれれば、それを評価してあげて皆で分かち合うことで、さらにモチベーションがアップする。

また、生徒進路指導や保護者との面談、父母会での説明など、先輩から後輩へ伝えていく社内習慣にも気を配っている。不文律として大事な部分は、よりベテランの配慮が必要だ。その評価についても徹底しており、見えにくい評価ほど塾長として気をつけなければいけないと自覚しているつもりだ。

ところで、最近おかしな電話があつて、とりあえず人物確認のために相手に会った。S商事という会社の男で、『M&Aに興味はないか』とか『どんなツールが入っていて、どこで教材提携しているのか』など細かく質問してきて、メモをとって帰っていった。そうした情報を誰がどんな目的で活用しようとしているのか、全く不明だが、知り合いの塾長たちのところにも同じようなアクセスがあったらしい・・・知らない間に塾業界が、いかがわしいビジネスのターゲットになるのが心配だ。（西本大手R塾）

[補足説明]

読売新聞や毎日新聞、そしてダイヤモンドやプレジデントなど、マスコミ各社が塾・予備校業界のM&Aについて報じるようになり、業界内や保護者だけでなく異業種からも注目されてきています。朝日新聞も教育関連の新たな事業をスタートさせることが決定していると言われ、今後も塾・予備校業界はマスコミへの露出が増えると予想されます。それに耐えるだけの体力とブランド力をつけるだけでなく、教育とは関係のない相手からのアクセスや不謹慎なヘッドハンティングに毅然として対抗できる体制も必要となっているのです。



■ 世界は広く日本は狭い

三井物産の礎を築いた益田孝、明治時代に近代産業育成の父と称された渋沢栄一。この二人は、派遣された年度は異なりますが、いずれも当時のフランスを訪れ、産業革命と近代化の進む欧州の現状を自分の目で見たのです。

益田孝は、帰国後、幕府が編成したフランス式陸軍に志願して騎兵隊を率いましたが、明治維新後は横浜で貿易商を始めました。徳川幕府から明治政府となった日本が、先進諸国と肩を並べるためには、貿易により文明開化を進めなければいけないと痛感したからです。

渋沢栄一は徳川家の昭武のフランス留学に会計係として随行、旅の途中、壮大なスエズ運河建設計画に感動し、フランスをはじめ欧州各地でその社会経済制度や科学技術などを見学、益田と同じように、「日本は小さく世界は広い。欧州の文明は日本よりはるかに進んでいる」ということを実感したのです。

二人は互いに刺激し合いながら、愛する日本という国の将来を憂えながら、ひたすら近代化の先頭を走り続けたのでした。

■ 攘夷から西洋化のリーダーへ

1863年には横浜居留地の外国人襲撃のため武器を強奪するとして、高崎城攻撃を計画した、攘夷論者の渋沢でしたが、西洋見聞で目が覚めされたように、潔く攘夷思想を捨て、明治政府で民部省、大蔵省で財政政策の近代化政策に関わり、退官後も実業界において、殖産興業のリーダー役を務めました。

彼の関わった会社は、第一国立銀行、王子製紙、大阪紡績会社、東京海上保険会社、日本郵船、日本鉄道会社、帝国ホテルをはじめ五百以上にものぼります。また、私利私欲を超えた「公」の考え方をもち、学校や病院など設立に関係した社会的公共事業は六百を超えられています。

■ 世界初の総合商社の設立

横浜で貿易の仕事をしていた益田は、井上馨の推挙で一時的に大蔵省に入りましたが翌年退官し、大阪に貿易会社先収社を起こし、後に豪商三井家がこれを吸収し、「三井物産会社」が設立され、益田が初代社長に就任しました。

その二年後には渋沢とともに東京商工会議所を創立、益田は横浜の貿易にはじまり、大阪と東京の商業の拠点づくりにも参加したのです。

以後も三井財閥の発展に尽くし、引退後も商業教育に力を注ぎつつ顧問だけは続けました。小田原に退いた晩年は、「鈍翁（どんのう）」と号し、茶道三昧の悠々自適の生活を送りました。鈍翁とは茶器「鈍太郎」に由来しますが、本人は「don't know」でもあったと言っていたそうです。

◆益田孝（ますだ・たかし 1848～1938）◆

江戸後期の嘉永元年、佐渡奉行の子として生まれ、幕臣から外国方通弁御用となり、1863年に幕府遣仏使節団に父とともに欧州を訪れ、近代化を目の当たりにする。明治維新後は、横浜で通訳や貿易に携わり、渋沢栄一と親しく交わり、草創期の日本経済を動かす、世界初の総合商社三井物産の設立に関わり、当時の日本の貿易総額の二割ほどを占めた。また、日本経済新聞社の前身である中外物価新報を創刊した。茶人としても高名で『鈍翁』と号し、「千利休以来の大茶人」とまで称された。男爵の爵位を受け、90歳で没した。

◆渋沢栄一（しぶさわ・えいいち 1840～1931）◆

江戸時代の天保年間、現在の埼玉県深谷市に生まれ、幕末の青年期は尊皇攘夷思想に目覚め、討幕計画を立てたりしたが、一橋慶喜に仕え、慶喜が将軍となったので、幕臣となり、1863年のパリ万博に将軍の名代として出席する徳川昭武の随員としてフランスを訪れる。様々な影響を受けて帰国後は、大蔵官僚として度量衡の制定や国立銀行条例制定に携わる。しかし大久保利通や大隈重信と対立して1873年に下野し、銀行の頭取に就任し、多くの地方銀行の設立を指導した。

多くの事業を血縁のない人物に譲り、子孫に多くを残すことはしなかった。関わった社会事業は数知れず、つねに「私」と「公」との区別を大事にしていた。子爵として91歳で没。千代田区常盤橋公園に銅像がある。